

# 『平家物語』の描く源頼朝像

——平清盛・重盛との比較から——

橋 口 晋 作

源平の時代、「日本國ノ大將軍」<sup>(注一)</sup>は平清盛から源頼朝へと移って行った。この時代を扱った軍記物『平家物語』は、この推移、屈折を対象とするに当たって、平清盛を「心モ詞モ及ハぬ「驕レル人」「猛キ者」として叙述の要に据えた。言うまでもないことだが、この清盛像——この序に相当する部分の表現が描き出している像と本文の各逸話が描いている像との異同の問題もあるが——は『平家物語』編著者の、この時代の移り変わりに対する解釈の結晶である。この様に一つの時代を描くことは必然的に編著者の解釈を生まざるを得ないのである。

ところで、『平家物語』で頼朝を実質的に蹶起させたと言われる高雄の文覚上人は、清盛の長子重盛について、

大政入道嫡子小松内大臣コソ謀モ賢ク心モ強ニテ父ノ跡ヲモ可継人ニテ  
オワセシカ小國ニ相應セヌ人ニテ父ニ先立テ被失ヌ

という興味深い評を下している。延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本は清盛の後を重盛が継ぐのか、頼朝に屈折するか「小國ニ相應」するのかわりかという視点を入れている様に見える。右に引用した箇所「小國ニ

相應セヌ人ニテ」という表現のない四部合戦状本も嘉応三(一一七二)年<sup>(注二)</sup>の相撲の節の折の重盛に言及した部分に(延慶本、長門本にもある)、当道系諸本でも宋国の医師の治療を拒む重盛に驚嘆する清盛の言葉に、それぞれ「不<sup>ヌ</sup>相應セ末代<sup>ニ</sup>之人」「日本ニ相應セサル大臣」(屋代本)といった類似の表現を有っている。<sup>(注三)</sup>従って、殆んど全ての『平家物語』に於いて(当道系諸本の場合、「日本ニ相應セサル大臣」という表現を一般化して良いのか、気になる所があるが)清盛・頼朝は「小國」「日本」「末代」に「相應」する「大將軍」として重盛に对照される陰翳があるかと思われる。但し、清盛像について述べた部分に注記して置いた様に、ここでも、文覚の言葉等が示す清盛・頼朝対重盛の対照と清盛・頼朝・重盛が個々に登場している場面での人間像との一致度如何の問題はある。この問題は『平家物語』の一作品としての完成度に関わることであろうし、一方から見ればこの作品の特殊な成立の仕方、鑑賞のされ方に関わることもであろう。『平家物語』の全体と部分のあり様には極めて大きな鍵が潜んでいる筈である。

本稿は、右のような問題意識を持ちながら、清盛と頼朝はどのよう一致しているのか、文覚の言葉の整合度を探ろうとするものである。

一

清盛と頼朝に先ず共通するのは「大果報ノ人」という点である。清盛は「六波羅ノフカスミノ高平太」と京童部に指差されていた青年から太政大

臣に至り、一方、頼朝は生け捕られて、清盛に親が何をしたかも理解出来ない子供に見えた情態（但し、当道系諸本などにはこのような記述がない）から征夷大將軍になり、鎌倉に幕府を開くに至った。

勿論、この二人の「龍ノ雲ニ昇ルヨリモ速カナ」立身出世は、清盛の場合も保元・平治の乱で後白河法皇方として功績があり、頼朝の場合も彼自ら言っているように「御使ヲ奉テ朝敵ヲ退ケ武勇ノ名譽長シタルニヨテ」であつた。但し、このような武勲は武家であれば誰しもが心掛ける処で、特にこの二人に限られるものではない。とすれば、この二人の社会的地位、政治力といったものが木曾義仲や源義経などの他の武將と二人を隔てたのであろうか。しかし、この立身出世の理由・背景も肝心の「万死ニ入テ一生ヲ得」「正ク手ヲ下シ身ヲ碎キタル」重盛とは殆ど差を見出し得ないし、第一『平家物語』が先ず清盛のそれを描こうとしていない。

『平家物語』が描いているのは冥界からの予言である。頼朝の場合、周知の、源中納言雅頼の侍が、「節刀ト云御劍」を神々の会議で清盛から取り上げて頼朝に渡すという決定がなされた（四部合戦状本では赤衣の衛府が劍を運ぶ）ことを夢見るといふ逸話がある。これに対応する様に延慶本・長門本・覚一本・百二十句本・両足院本・八坂本には「入道嚴嶋ヲ崇奉由來事」の章段中に「我与ヘタラム劍ヲ持ナラハ王ノ御守リトシテ司位一門ノ繁昌肩ヲ並ル人有マシ」と言つて嚴島大明神が清盛に「銀ノ蛭卷シタル小長刀」を与えるといふ逸話が配されている。これらの諸本では具体的に「節刀ト云御劍」が持ち運ばれていて、記事が整っているが、「銀ノ蛭卷

シタル小長刀」の出て来ない四部合戦状本・源平盛衰記・屋代本・竹柏園本等にも「司位一門ノ繁昌肩ヲ並ル人有マシ」といふ言葉はあつて（但し、源平盛衰記では「我身の栄花をも開 子孫の繁昌うたかひなし」となつてゐる）、清盛の栄達が予言されている。

猶、清盛の立身出世についてだけなら、わざわざ「入道嚴嶋ヲ崇奉由來事」まで下らなくても、早く第一本四「清盛繁昌事」に「熊野権現ノ御利生」とする逸話があつた（源平盛衰記は大威徳の法や陀天の法を修したことや清水寺の夢想を記す。猶、四部合戦状本・南都本・屋代本・竹柏園本・八坂本等は冒頭部、清盛登場時に利生譚を記さない）。

このように冥界の意志によつて清盛も頼朝も立身出世を遂げたのだが、その意向に問題のあるような気がする。というのは清盛の場合もその栄達がいままで続くかという点で、条件なり期限なりが付いているように思えるからである。

清盛の場合、諸本によつて複雑だが、延慶本・長門本・四部合戦状本は「ソモ一期ソヨ」「不マシ叶孫の世マシ」と期限が付いている。又、当道系諸本では「悪行アラハ子孫マテハ叶マシキソヨ」（屋代本）といった条件になつてゐる。一方、源平盛衰記は「神約なれば子孫迄も可守」とあつて、条件や期限がなく、他の諸本と大きく異なる。このように源平盛衰記に問題は残るが、殆どどの本に於いて条件や期限が付いていられるのである。

これに対し頼朝の場合は、先述の頼朝が「節刀ト云御劍」を預る所で、屋代本・中院本・八坂本等を除く諸本では春日大明神が「其後ハ我孫ノ其

御劍ヲハ給ハランスル也」と述べていることである。頼朝に預けられた「節刀ト云御劍」が又々移るのは何故か、これらの諸本にはその意識があるのかもしれない。

ところで、延慶本・源平盛衰記（中院本・八坂本）では、重盛が夢で三島明神に「源頼朝カ此御前ニテ千日カ間歎申シ事力余ニ不便ナレハ汝父大政入道浄海カ頸ヲ切テツナキタソ」という告げを得ることになっている（覚一本・百二十句本・両足院本には頼朝の名前が出て来ない。又、屋代本・竹柏園本等にはこの逸話そのものがない）。これらの諸本では重盛は冥界の意向をほぼ受け取っているということになるか。一方、頼朝の名前の出て来ない覚一本等では、「日本國ノ大將軍」が頼朝に移ることも知らないまま重盛は死を覚悟するのである。

このように清盛・頼朝（重盛）は冥界の意志によって、貴族を中心とする社会の中軸に座を占め、又、そこから退場する処に最も大きな共通点があると言えよう（但し、諸本により問題も残っていない訳ではない）。

## 二

次に各身分の人に対する態度を比較しながら検討してみよう。

### (イ) 後白河法皇

天下を掌握するまでの清盛の態度については、彼自身が「保元平治ヨリ以来君ノ御為ニ命ヲ捨ル事既ニ度々也」と言っている通りであろう。この法皇への勲功が清盛に破格の出世を齎したのである。法皇と清盛の不和・

対立が描かれ出すのは永萬元（一一六五）年に山門の衆徒が清水寺を攻める為に山を下って来た時からである。この時、「上皇山ノ大衆ニ仰テ平中納言清盛ヲ追討スヘキ故ニ衆徒都へ入」という噂が流れた。重盛を除く一門に衝撃が走ったが、衆徒の下山は額打ち論の復讐ということだけで済んだ。法皇も六波羅へ御幸あつて、そのような考えのない態度を示されたが、清盛は還御後、重盛に「聊モ思食寄り被仰旨ノアレハコソ加様ニモ漏レ聞ラメ 其等ニモ打解ラルマシ」と言うのであった。

この事件の後、『平家物語』は院近臣の平家打倒の言動を描き重ねて行き、その結末が有名な鹿谷事件となる。が、この密計も多田蔵人行綱の裏切りで事無きを得た。しかし、清盛は法皇に対して「猶モ北面ノ下臆共カ諫申事ナムトアラハ當家追討ノ院宣被下ヌト覚ソ」と不信感を募らせ、「善悪法皇ヲ先迎へ取奉テ此八条ニ押籠マヒラセテイツチヘモ御幸ナシ奉ラム」と決意するに至る。この時は重盛の諫言で法皇への直接行動は思い止まるが、重盛没後、その処置への不満等から、遂に法皇を鳥羽殿に軟禁する。

頼朝には、清盛のように法皇に対して直接何らかの手を下すといった行動はない。彼は先ず、法皇を鳥羽殿に閉じ籠めた平氏を追討する為に挙兵し、次いで法住寺殿を攻撃して平氏と同様の振る舞いを犯した義仲を倒した。従つて、この間の頼朝は丁度栄華を極める以前の清盛に相当していると言えよう。猶、平氏を倒してから後の頼朝が、直接法皇に危害を加えることはないものの、法皇の心中に清盛に劣らぬ程の不快感を与えたかと考

えられることについては後節で述べる。

重盛は「莫大ノ朝恩ヲ忘レテ君ヲ傾進セマシマサム事天照大神正八幡宮日月星宿堅牢地神マテモ御免レヤ候ヘキ」という態度で一貫している。彼は清盛を、その栄華を極める以前の情況（態度）に止めようと必死である。頼朝は、重盛がそこに止まらせるのに必死の努力をしていた情況を、天下を鎮める手立てを尽くす中で自然に手にしていたということになるうか（勿論、以後の問題はあるが）。

#### (口) 摂政を始めとする貴族

清盛の貴族に対する狼藉が描かれ出すのは「平家殿下ニ恥見セ奉ル事」の章段からである。嘉応二（一一七〇）年、「乗合」事件で孫平資盛が摂政松殿基房に辱められたことを聞いて清盛は「設ヒ殿下ナリトモ争カ入道カアタリヲハ憚リ思給ハサルヘキ」「カムル事ヨリ人ニハアナツラルムン殿下ヲ怨奉ハヤ」と言つて遂に報復行動に出、基房の御出を待ち懸けて前駆・隨身の本鳥を切つて、一行を散々な目にあわせた。

又、鹿谷の陰謀に対しては、新大納言成親を遠流の後謀殺、左衛門入道西光を処刑、その他関係した院近臣やその子弟を追討したり、流罪にしたりしている。更に、重盛没後には関白基房、太政大臣師長を流罪にしたのを始めとして、「都合四十二人官ヲ止テ追籠」るに至った。

頼朝について問題になる言動が出てくるのは、中原泰（康）定が征夷大將軍に任じる院宣をもって鎌倉に下った時、頼朝が「秀衡カ陸奥守ニ成サレ資職カ越後守ニ成サレ忠義カ常陸守ニ成テ候トテ頼朝カ命ニ不随候モ無

本意次第二候へハ早く彼等ヲ可追討之由院宣ヲ被下候ヘシ」と述べることからである。話題を戻してしまいが、この言葉は、「守ニ成サレ」に注目すれば、法皇の人事に対する批判を含んでいる。それは丁度清盛が西光に「アレ程ノ奴原ヲ召上テナサルマシキ官職ヲナシタヒテ召仕ハセ給之間ヲヤコ共ニ過分ノ振舞スル者哉トミシ」と言っている言葉が含んでいる法皇批判に近い。又、「命ニ不随」者は追討するという敵しい姿勢も、そのような場面は出て来ないが、清盛と一致するものに違いない。少し酷いが、清盛が「自ラ六波羅殿ノ上ヲアシサマニモ申者アレハ是等カ聞出シテ吹毛ノ咎ヲ求テ行向テ即時ニ滅ス」という「禿童」を放った姿勢もこの頼朝からそう遠くはあるまい。とは言つても、頼朝の場合はこれらを直ぐに実行した訳ではない（この場合は任命者である法皇に追討の院宣を求めることによつて、法皇の人事を牽制し、「猛キ」頼朝を印象付ける、頼朝の例の演技という感が強い）。

延慶本・源平盛衰記には、平家滅亡後の文治元（一一八五）年十二月「可預議奏ニ人ノ交名ヲ源二位自関東注進ス」ということが記されている。続いて、義経に親しく、頼朝追討の宣旨を出した大藏卿泰経、参議親宗以下の貴族が或いは配流、或いは解官の処置を受けた記事がある。後者は、「威君潜臣不異平将」と評されているが、これらの処置は殆んど鹿谷事件の時の清盛のそれに一致している。僅かに清盛の場合は自らの家人の手でそれらの人々の逮捕が行なわれたのに対し、頼朝の場合は「申状ニ任テ」朝廷の手で行わせたのが異なるだけである。前者についても「世ノ重

シ人ノ婦スルコト平将ニ万倍セリ」と評されているが、これも人事への口入であり、見方を換えれば「悪行」に墮する虞れがある。

更に、延慶本・長門本・四部合戦状本では文治二年、頼朝の推挙で月輪殿兼実が摂政になり、近衛殿基通が辞任に追い込まれたことが記されている。これも、清盛が重盛没後の処置を不満として基房を左遷し、義仲が法住寺殿合戦の後基通を廃したのに近い。四部合戦状本・長門本には「法皇被<sup>ケ</sup>歎思食源二位執事難<sup>ク</sup>黙止御力不及<sup>ハセ</sup>」という表現が付けられていて、頼朝は清盛・義仲と殆んど変わらないという風である。

当道系諸本や南都本には右のような頼朝の朝廷人事に対する口入は記されていないが、それは守護・地頭の設置（後述）に頼朝の態度を代表させて省いたと見るべきではないかと思う。

平家滅亡後の頼朝が清盛に似て来たことを非当道系諸本は明らかに記していない、当道系諸本は言外に匂わしていることになろうか。

重盛の場合、乗合事件で我が子を辱められても「重盛ナムトカ子共ト申サムスル者ハ殿下ノ御出ニ参會テ馬ヨリモ車ヨリモ下ヌコソ尾籠ニテ候ヘ」と言い切る処があった。「天兒屋根ノ御末朝政ヲ掌給」と述べる重盛が摂政・関白人事に口出ししようとは容易に考えられない。勿論、政権の転覆を謀ったりした者には相応の刑罰が与えられるべきだという考えは重盛にもある。鹿谷事件に関係した「大納言以下ノ輩ニ所當ノ罪科被行」ことは彼も認めているのである。但し、重盛の言う「所當」は「神明仏施ノ擁護」「冥衆善神ノ加護」が期待される範囲を超えてはならないのだ。この点で

私なく、法に任せてという、清盛とも頼朝とも異なる色合いがあるように思える。

### 三

この時代、武士は主に源氏、平氏に分かれて張り合ったのだが、その相手方に対する処置について見てみたい。

源平の張り合いが如何に激しかったかは、重盛のような人でも基房との乗合事件に関して「頼政時光躰ノ源氏ナムトニアサムカレタラハ誠ニ恥辱ニテモ候ナム」と述べていることから想像出来よう。

清盛による源氏の処置は『平家物語』の語る世界の前に（済んだという風に）ある。清盛の絶頂時、源氏方は「保元ニ為義切ラレ平治ニ義朝誅テ後ハ末ノ源氏少アリシカトモ或ハ流サレ或ハ誅レテ今ハ平家ノ一類ノミ繁昌シテ頭ヲサシ出ス者ナシ」という状態にあった。しかし、清盛が法皇を鳥羽殿に軟禁すると、清盛に即いていると見えた頼政が高倉宮以仁王を奉じて挙兵する。次いで、伊豆国に流されていた頼朝が文覚の勧めで旗揚げする。これが切っ掛けになって、「頭ヲサシ出ス者ナシ」と見えていた諸国の源氏が義仲を始めとして次々に蜂起し、臆て「何ナラム末ノ世マテモ何事カアルヘキ」と見えていた平家を打倒してしまうのである。源平の対立というのは『平家物語』の表面に出てくる部分と隠れている部分とがあつて玄妙なる様相を呈している。

この源氏の棟梁として平家を倒す中心人物となった頼朝は、父義朝が

「信頼ニ被語テ朝敵ト成シカハ其子共一人モ被生マシカリシ」ことになつていたので、清盛が「故池尼御前ノ難去被歎申シニ付テ死罪ヲ申宥テ遠流ニ成」たのであった。頼朝に謀叛を起こされて、清盛は自分の「青道心」を悔い、「哀ハ胸ヲ焼ト申例へ」を引いて自嘲する。清盛の遺言は「相構テ頼朝カ首ヲ切テ我墓ノ上ニ懸ヨ」ということであつた。しかし、平家はこの遺言に応えることは出来なかつた。

壇の浦の戦いで長かつた源平の合戦も決着し、源氏は多くの「生虜」を得た。頼朝はそれらの内、宗盛父子や重衡といった平家棟梁家の人々をそれぞれに処刑し、時忠父子や中納言律師忠快等公家平家や僧籍にある者を流罪にした。勿論、平家への処罰はこの「生虜」に止まらなかつた。頼朝は「平家ノ一族ト云者ヲハ一人モ不漏皆可失」「能く尋穴クリテ腹内ヲモ可求」と北条時政に命令したという（但し、延慶本、四部合戦状本以外は地の文に相似た表現を記すだけで、頼朝の言葉とはしていない）。時政が勸賞付きで平家狩りを行った為、平家の子孫ならぬ者まで召し出され、処刑された。『平家物語』は末尾に、新中納言知盛の子伊賀大夫知忠が討ち死にしたり、平家の侍越中次郎兵衛盛次が密告されて切られたりして、平家が根絶やしにされて行く様を描き出して行く。こうしたことから、水原一氏は、頼朝には「桀紂的イメージ」「巨魔の相貌」がある(注四)と指摘されている。頼朝の考えは、或いは延慶本、四部合戦状本が記しているように「無沙汰ニテ末ノ世ノ我子共ノ敵トナスナ」ということかも知れない。この頼朝は「青道心」を悔いる清盛を反面教師としている風に見えるし、

「恩ヲ不知者」とも言える自分を他人の中に見て恐れている風でもある。尤も、『平治物語』の清盛も最初は「男子なればたゞは置かたし」（学習院本）という態度であつた。

ところが、このような頼朝も清盛と相似た事態に陥ることになる。「平家ノ嫡ニテオワスル上年モヲトナシカムナル」六代は平家の子孫の中で最も生かして置けない人物である。しかし、六代には「前ノ世ニイカナル契ノ有ケルヤラム余ニ糸惜」と思うに至つた文覚が付くことになった。頼朝は法皇の院宣を貰うのに奔走して貰つた時、文覚に「我世ニ有ハ何ナル事ナリトモ一期ノ程ハ聖カ云事ヲハ違マシ」と誓つていた。その文覚に「聖カ心ヲ破テハ二位殿争カ冥加モオワスヘキ 若此事聞給ワスハヤカテ大魔縁ト成テ恨申ムスル」と論駁されると、遂に六代を文覚に預けざるを得なくなつた。このあたり、池尼上に断食して頼朝を生かすよう迫られ、重盛に説得されて、遂に頼朝を遠流に赦す『平治物語』の清盛と殆ど変わらない。

しかし、頼朝の没後、文覚上人が流罪になると、六代は再び捕えられて、遂に千本の松原で切られてしまう。「此ヨリ平家ノ子孫ハ絶ハテ給ニケリ」。「頭ハ剃トモ心ハ猛キ事ハヨモ失給ハシ」（四部合戦状本、源平盛衰記、南都本にはない）と恐れていた六代を切つて、源氏は禍根を断ち得たのである。この点は平家と対照的だ。

源氏の側から見れば、『平家物語』は目出たしめでたしで終わつていよう。しかし、源氏の世は三人の将軍で尽きてしまうのである。『平家物語』

諸本では、先述のように「雅頼卿ノ侍夢見ル事」で、春日大明神が「節刀ト云御劍」を頼朝（源氏）の次に預ることになっている（但し、屋代本等には春日大明神のことは出て来ていない）。そこで、次に兄弟、一族に対する態度を比べてみることにする。

『平家物語』の描くところでは清盛の時代、平家一門はほぼ団結していた。唯一の例外が延慶本・長門本の描く池大納言頼盛である。寿永二（一一八三）年、平家一門から離脱して都に残り留る時、頼盛は「故人道ニモ随フ様ニテ随ハサリキ」と言っている。清盛・頼盛の確執の原因として、これら二本が挙げているのは「平家嫡々相傳」の太刀「抜丸」の所有をめぐってである。しかし、確執があったといっても、頼盛は表面上「随フ様ニ」取り繕っていたのであろうし、清盛も「心得ス被思ケリ」という程度で、それ以上のことがあったとはどこにも描かれていない（『愚管抄』には「治承三年冬ノ比アシサマナル事トモ聞エシカハナカク弓箭ノミチハステ候ヌル由故入道殿ニ申テキ」という頼盛の言葉がある）。

これに対し、頼朝の方は叔父行家、従弟義仲、異母弟範頼、義経達を次ぎつぎに攻め滅ぼしている。

先ず木曾義仲の場合、「兵衛佐与木曾不和ニ成事」の章段を見よう。この時は、十郎藏人行家が所領の不満から義仲の許へ奔ったことが契機となった。延慶本・長門本・源平盛衰記では、頼朝は「十郎藏人ノ云ワム事ニ付テ木曾冠者頼朝ヲ責ムト思心付テムス 襲ワレヌ先ニ木曾ヲ討ム」ということで行動を起こすことになっている。一方、四部合戦状本・南都本・

当道系諸本では「頼朝ヲ可討之由慥ニ被廻謀ケルトコソ聞ケ」（屋代本）というのが、その理由である。前者の場合は食うか食われるかの情態にある競争者の一人としてしか義仲を見做していない。これは義仲の「義仲サヘスケナ當リ候ワム事モイカニソヤオホヘテ打ツレ申テ候」という弁解の言に見られる態度と対照的である。後者の場合も義仲の行家への態度は変わらない。猶、延慶本・長門本・源平盛衰記には「平家皆一門ノ人ノモヒアヒテアリシカハコソヲタシウ廿余年モ持チツレ 源氏ハ親ヲ打子ヲ煞シトシ打セムホトニ又平家ノ世ニソ成ムスラム」と都の人が評判しているという義仲の言葉がある。

次に義経の場合を見てみよう。諸本等しく記している処であるが、世が静まって、都では義経の評判が高まった、そして、「鎌倉二位殿ハ何事カシ出タル高名アル」「只此人ノ世ニテアレカシ」とまでもてはやされるのが頼朝の耳に這入る、頼朝は「頼朝力謀ヲ廻シ兵ヲモ差上レハコソ平家ヲモ滅タレ 九郎計ハ争カ世ヲモ可鎮」と言い、時忠の聳になったりしたことを「カク人ノ云ニ誇テ世ヲ我マムニ思タルニコソ」と不快に思うのであった、これがきっかけとなって急速に義経を疎んじて行くというのが頼朝・義経の仲である。

確かに時忠の聳になったのは文書を取り戻す為の時忠の策にまんまと乗せられたに過ぎない訳で、義経の落ち度も少くない。しかし、頼朝の態度も自分の傘下から逸脱することを絶対に許さないという姿勢が強すぎて、兄弟の情愛に乏しい。

右のように、兄弟一族に対する態度を比べてみると、清盛の時代、ほぼ平家一門は団結していたのに、頼朝（を中心とする源氏）には「一門ノ人ヲモヒアヒテアリシ」という情態に乏しく、極めて対照的だと言えよう。

## 四

最後に身分・官職・領地について見てみることにする。

清盛は自ら太政大臣の官に就き、「一門公卿十余人殿上人三十余人諸国受領諸衛府妻本要所司都合八十余人 代ニハ又人モナクソ見ケル」という状態を生んだ。これに対し、頼朝は建久元（一一九〇）年正二位大納言の右大将に就いた。しかし、源氏一門が高位高官に連なるということは全く起こらなかった。

右のように官位に関しては対照的だが、所領についてはどうなのだろうか。

清盛の時代については「日本秋津嶋ハ僅ニ六十六ヶ國 平家知行ノ國三十余ヶ國 既ニ半國ニ及ヘリ 其上庄藺田畠其數ヲ不知」という状態であった。頼朝の場合は、兄弟一族を次々と肅清して来たので、所領についても清盛の場合とは異なるのではないかという気がする。ところが、文治元（一一八五）年、諸国に守護、地頭を置きたいと頼朝が願ひ出た所で、「帝王ノ怨敵ヲ罰ツル者ハ半國ヲ給」という経文が例として挙げられている。この「半國」という表現に注目すれば、清盛の場合は知行の国、頼朝は守護、地頭の兵糧米と形態は異なるが、実質においては同じということ

になりはしないか。「吾國ニハ未タ其例ナシ 是ハ過分ノ申状也 難有御許容トハ思食セトモ源二位ノ所被申難去被思食」という文を読むと、法皇にとって頼朝は曾ての清盛と変わらない人物になっていると考えられる。

## 五

以上を纏めると次のようになる。

壇の浦の戦いで平家を滅すまでの頼朝は、全盛を極めるまでの清盛に近そうである。従って、法皇を中心点に取れば、「悪行」を働く清盛と退治して行く頼朝が対称をなし、重盛はその清盛を全盛以前に戻そうと孤独な闘いをしているという図式が描けそうだ。

ところが、平家潰滅後、頼朝の相貌が変わって来る。それは、守護、地頭の設置に集約される傾向があるが、非当道系諸本では摂政を始めとする貴族人事への口入も記載して、清盛に変わらなくなった頼朝を浮き彫りにしている。とは言っても、頼朝は諸事朝廷の手で処置を取らせ、自分は圧力を懸けるに止まっている点と、法皇には直接の手を下していない点とで、清盛と一線を画す処がある。

清盛と異なると言えば、兄弟、一族に対する態度も異なる。清盛も保元の乱の時は同族間で戦ったのだが、それ以後は「一門ノ人ヲモヒアヒテ」二十年の繁栄を築いた。それに対し、頼朝は義仲を始めとして、兄弟・一族を次々と滅ぼして行く様が描かれる。

頼朝を生かした為に滅びた平家と異なり、六代を処刑し得た源氏には平



家からの報復はない。しかし、源氏の中で頼朝一人が残った時、その制覇の目出度さの陰に「日本國ノ大將軍」の交代も又孕まれていたのだ。屋代本・中院本・八坂本等以外はそのことを神々の会議で明白にしているのだが、「日本國ノ大將軍」の交代が言えない屋代本等も頼朝の兄弟・一族への肅正を他本と変らず曇み懸けて行っている。ここには極めて大きな問題が横たわっていきそうに思えるのだが、その解明の方法は筆者には未だ見えない。

しかし、本稿で頼朝が清盛に近付いて行く様はほぼ捉え得たのではないかと考えている。『平家物語』の描く頼朝は清盛の轍の跡をほぼ辿っているのである。「小國ニ相應」という表現に即して検討すれば、『平家物語』からは以上のようなことが辿られるのではないか。従って、重盛が頼朝とも異なる理想性を有っていたことも明かである。

但し、実際の文覚が頼朝と清盛の類似を右のように捉えていたかどうかは不明である。しかし、『平家物語』の編著者には両者の類似がかなり意識されていた筈だ。それにつけても、非当道系諸本の編著者はどういう人物であったか、興味は尽きない。

(注一) 本稿では特に注記しているものを除き、引用は全て延慶本によっている。

(注二) 史実は承安四(一一七四)年であることを水原一氏が考証されている(『延慶本平家物語論考』(昭和五四年六月)の第一部「本文

に関する概説と研究」の「延慶本の文体と構造」)。

(注三) 「小國ニ相應セヌ人」という表現については拙稿「重盛像の検討

―『平家物語』と文覚―」(『鹿児島県立短期大学紀要』平成三年一二月)で別な観点から注目した。

(注四) 「源頼朝」(『國文學』昭和四二年三月)。

(平成四年四月二十一日受理)